
桜吹雪八此処ニ散ル

秋羽 梨紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜吹雪八此処ニ散ル

【Nコード】

N8704S

【作者名】

秋羽 梨紅

【あらすじ】

1999年、4月4日。

学校から帰宅していた主人公の天夢乃 醒夜と、友人の桜吹雪。帰宅した醒夜の家で2人を待っていたのは、醒夜の両親の死体。

真相を追うことに見え隠れする、現実と非現実の姿。

変わり果ててゆく、醒夜を取り巻いていた世界。

絡み合う真実と虚実の世界。

醒夜は、真相を暴き出すことはできるのか……？

？・二面鏡ノ自分

届かないのなら、願わなかった。
叶わないのなら、祈らなかった。

届くのかもしれないと。
叶うのかもしれないと。

……そう、信じていたい自分がいた。今、この瞬間でさえも。

昨日はあんなに暖かかったのに。
今日はこんなにも冷たくなっていた。

暖かく微笑んでいたのは誰？
冷たく嘲笑っていたのは誰？

まるで別の人物に見えるのに。
それはどちらも、自分自身の姿だった。そして、君の姿だった。

今、ここにいる自分は誰なのか。
そして、本当の君は誰だったのか……。

後悔と懺悔に滲んだ涙を拭う。

視界に映るのは、漆黒の闇を思わせる夜空。

そこに散りゆく桜の花びらたちだけが、
真実を知っている……。

？・二面鏡ノ自分（後書き）

こんにちは。初投稿の秋羽梨紅です。

このたびは、「桜吹雪八此処ニ散ル」を読んいただき、ありがとうございます。

まだまだ文章力が未熟なため、伝わりにくいことなどが多々あると思います。精一杯努力させていたできます。なので、お付き合いいただけると嬉しいです。

次回作は近いうちに出せると思います。それでは！

？・早朝ノ風景

1999年、4月4日。早朝。

俺は目覚まし時計の不快な音で目を覚ました。
カーテンからは、明るい朝の陽の光が差し込んでいる。

布団からもぞもぞと起き上がり、手探りで探し当てた目覚まし時計の音を止める。

その直後に訪れた静寂が、部屋の中を満たす。

「^{だいや}醒夜あゝ？ そろそろ起きなさい」

階下から聞こえてきた、母さんの声。

ハツとして時計を見ると、時刻は既に7時を過ぎている。

「うわっ！ いっけねえ」

手早く朝の支度を済ませ、俺はバタバタと足音荒く階段を下りて行く。

階下のリビングでは、俺以外の家族全員が朝食を摂っているところ

だった。

「どうしたのー？ 醜夜が寝坊なんて珍しいわね」

ニコニコと微笑みながら、俺の朝食を用意してくれる母の天夢乃美波。^{なみ}

優しくおっとりした性格の、どこにでもいるような専業主婦だ。

「寝不足なんじゃないか？ 最近寝るの遅いみたいだしな」

読んでいた新聞から顔を上げ、明快に笑う父の天夢乃雅斗。^{てんのまゆと}

一見普通だが、オカルト系統の話を半ば本気で信じている困った父親だ。

「お兄ちゃん、またゲームやってたんじゃなくい?!」

飲みかけの飲み物を片手に、人懐っこい笑みを浮かべる妹の天夢乃百合亜。^{ゆりあ}

純粹無垢な性格が仇となり、父さんのオカルトを本気で信じ込んでしまっている中学2年生だ。

「おいおい。 それじゃあ俺がまるでゲーマーみたいじゃねえか！
まあ、否定はしないが」

そして、朝から賑やかな家族に呆れた風を装う俺、天夢乃醜夜。^{てんのうしや}
俺の通う、鈴西高等学校で生徒会長を務める、ごく普通の高校三年生。

「否定しないんだ……」

「結局ゲーマーってことなのよね ふふ」

「醒夜。ゲームのやり過ぎはよくないぞ」
「わかってるってば！」

俺はそう言いながら、朝食の味噌汁を一気に流し込む。

時刻は七時二十分……今日は確か、七時半から生徒会があったはずだ。早く行かなくては。

生徒会長が遅刻してしまつては、恰好が悪い。

食べ終わった茶碗もそのままに、俺はあたふたと玄関へと向かう。

「んじゃ、行ってくる！」

？・早朝ノ風景（後書き）

こんにちは。秋羽梨紅です。

今回は、主人公の家族について……です
ね。ヒロインの桜吹雪は次回登場の予定です。

？・桜吹雪

家からしばらくしたところにある、純鈴公園。
そこで、彼女は今日も律儀に俺を待っていた。

「醒くーん、おはようっ！」

俺の姿に気がつくのと、満面の笑顔で手を振ってくる。彼女が、桜吹雪だ。

金色掛かった大きな瞳が印象的。俺と同じ高校3年生なのだが、中学生を名乗ることすら怪しいといえる容姿。さらに、長く茶色のツインテール髪が幼さを助長させている。

生徒会副会長を務めてはいるが、真面目な性格なのかというと、断じてそんなことはない。

見た目同様に、精神も幼いままと言って良いだろう。

幼馴染である俺でもいまいち掴めない、不思議なヤツだ。

「醒くん、今日来るの遅くない？ どうしたの？」

「寝坊しちまったんだ。ごめんな」

「ふうん……？ 今日の帰り、醒くんのお家にゲームしに行っても良いなら許そうかなあ」

「なんだそりゃ。 そんなことしたら吹雪、叱られねえか？」

「大丈夫だよ！ ね、行っても良いでしょ？」

「吹雪が平気なら、今日は予定ねえから別に構わないけど……」

「本当？ やったあ！」

不安そうな表情から一転。吹雪は本当に嬉しそうな笑顔を浮かべた。こんなことで喜ばれると、なんだかくすぐったくなってしまう。

「今日こそ、醒くに勝ちたいなあ……」

「おっと、そんな簡単に俺に勝てると思ってるのか？」

「うん、思ってるよ」

「即答かよ！」

「えへへ。あ、今日は百合亜ちゃんいるの？」

そうそう。吹雪とは家族ぐるみで仲が良かったりする。

百合亜は吹雪のお気に入り……1人っ子の吹雪には、妹のようなものなだろう。

「わからねえな」

「そっか！ 部活……があったりするのかなあ？」

そう言って、吹雪は苦笑する。俺もだ。

百合亜は、オカルト研究部……略してオカ研とかいう、訳のわからない部活に所属している。

恐らく部活の活動内容は、部活の名前から考えてオカルトなものを研究したりするのだろう。

百合亜がいうには、個性的な人間が多いらしい。……だいたい想像はつく。

……というか、その部活の存在自体がそれこそオカルトだろう。顧問は存在するのか？存在するなら、それはどんな人なんだ？

そもそも、その部活の存在を、百合亜の学校の生徒会は認めているのか？もしも俺の学校でそんな部活を考案されたとして、俺は問答無用で破棄すると思うがな。……まあ、いいだろう。

「あの部活、活動している日の方が少ないらしいから、多分いるんじゃないか?」

「それ、部活として成立できるの?」

「さあ……」

クスリと笑う吹雪に、俺は肩をすくめて答える。

百合亜のことは、兄である俺でもよくわからないからな。

深い詮索はあまりしない方が得策だろう。……オカルト不信な俺の精神衛生上。

正直、オカルトさえ絡まなければ素直で可愛い妹なのだが……非常に残念だ。

これも、オカルト好きな父さんのせいだろう。

父さんへの軽い復讐心を胸に、俺は吹雪と談笑しながら学校への道のりを歩く。

楽しい時間とは不思議なもので、生徒会の会議に遅刻しそうで急がなければならぬことなど、爽やかな朝の空の彼方へと忘れ去っていた。

？・桜吹雪（後書き）

いつもよりも少し長くなってしまいました。秋羽梨紅です。

今回は、ヒロインである桜吹雪の初登場でした。

個人的には、吹雪はロリな美少女なのです！

確実に自分の趣味に走ってしまいました……。後悔はしていません、はい。

あと、コメント等頂けると嬉しいです！

そろそろ話は本題に入ります。遅くてすみません。

頑張りますので、これからもよろしく願います！

？・最後ノ紅

そして、ようやく訪れた放課後。

騒がしい教室の中、俺は黙って帰り支度をする。

「よっ、醒夜。もう帰んのか？」

そんな俺の肩に手を置き、軽い調子で話しかけてきたのは、友人の
おおみやとっほ
大宮飛翔。

少し長めの銀髪といい、着崩した制服といい、じゃらじゃらと付けたアクセサリーといい、校則を無視しているどころか敢えて挑戦していると思えない。

しかし、見た目こそ悪ぶってはいるが、実は友人思いで涙もろい、とても良いヤツだ。

「まあな。生徒会で雑用押し付けられちまってさ」

俺はそこで言葉を切り、肩をすくめて苦笑してみせる。

そう。今朝の生徒会の集まりに大遅刻を果たした俺と吹雪は、その分の埋め合わせと称して、生徒会で溜まりっぱなしになっていた雑用を強制的に押し付けられたのだ。それも、尋常でない量。

俺も吹雪も、驚きのあまりに何も言えなくなっていた。

「大変だな。それ、美柑あたりの差し金か？」

「そう。まったく……参ったもんだよ」

まあ、元はといえば、遅刻なんかした俺が悪いのだが。

ちなみに美柑というのは、かなりやみかん金糸雀美柑。生徒会書記を務める2年生だ。

長いストレートの黒髪と、深淵を思わせるような瞳が特徴的な、黙っていれば大人っぽい容姿の美少女に見えなくもない。中身はかなり男勝りで、アクティブな性格。なんだか、色々な意味で残念ヤツだ。

「おおーいつ！ 醒くうーん!!!」

飛翔と話していると、高い声が響いてきた。吹雪だ。

「吹雪ちゃん、迎えにきたみたいだぜ」

「そうだな。じゃあ飛翔、また明日な」

「じゃあな」

飛翔に別れを告げ、鞆を引つ掴んで早々と教室の外へ出る。朝といい帰りといい、今日は吹雪を待たせてばかりだな……。

「おう。待たせてごめんな？」

「ううん。全然大丈夫だよ」

「サンキユ。じゃあ、行くか」

「うんっ！ 今日こそ絶対に勝つぞお!!!」

「そんな簡単に勝てると思うなよ？」

談笑しあいながら、俺たちは今朝と逆の道を歩いて行く。

紅く輝きを放つ夕陽が、俺と吹雪を静かに包んでいた……。

？・最後ノ紅（後書き）

お久しぶりです。秋羽梨紅です。

色々と忙しく、更新が遅くなってしまいました。すみません。

次回から話は本筋に入っていきます。

それでは、また次回お逢いしましょう！

？・嘆キ少女ノ分裂

不幸と狂気の中で生まれてきた少女。

大人たちの都合によって、生まれ得ないはずの運命にあった少女は生かされた。

そうして生まれてきた少女。すべての元来の遺伝子を継ぎ、この世界に生を受けた。

銀に輝く長い髪に、感情のない銀の瞳。獣化した耳に尾。そして、銀の美しい翼……。

すべての遺伝子を受け継いだ少女の姿は、それはとても美しく。そして、残酷だった。

元来すべての遺伝子の情報は、大きすぎるあまり、少女の身体に入り切ることができなかった。

そしてその遺伝子を継ぐため、少女は生まれる前に、別世界にもう1人の少女を造り出した。

少女自身には、元来の遺伝子すべての情報だけを。

少女の造り出した少女には、遺伝子以外の少女の個、すべてを。

周りの人々によって強制的に生を受けることとなった少女は、それにより、少女自身のすべてを失う運びとなった。

そして、その運命の片棒を持つこととなった、少女の個のすべてを担うこととなった、少女により生み出された、本来存在するはずのない存在……少女に生かされた、モノ。

こうして、それぞれ別世界に生を受けた1人と1つの少女。
呪われた鎖で繋がれた少女たちが無知であろうと、いつか、歯車は
狂うのだらう……。

……ごめんなさい。

私の運命を、何も悪くはないあなたに背負わせました。

それはきつと、私の許されない大罪。

何度謝っても許されることはないのでしょうか。

ごめんなさい。

どうか。どうか、あなたのために祈ることを許してください。

どうか……モノではなく、ヒトとして、幸せに生きてください……。

？ ・嘆キ少女ノ分裂（後書き）

お久しぶりです、秋羽梨紅です。

リアルが最近色々あったため、更新が遅れてしまいました。

しかもこのクオリティは……ないですね。崩壊の域を越えました。ごめんなさい。この駄文作者を見捨てないでください……。

……とりあえず、これにて第1部は終了となります。

次回からは2部！やっ和本題になります。わーいわーい ……こほん。

それでは、また次回にお会いいたしましょう。

？・日常ノ破壊音

「なあ、吹雪」

「うん？　なあに？」

……どうしてだろうか。俺の中に、この扉を開けることを恐怖する俺がいる。

「……今日、家に行くのやめないか？」

「どうして？」

不思議そうに。心底不思議そうに、目の前の吹雪は首を傾げて尋ねてくる。

わからない。自分自身でもなぜなのかわからない。

だけど、確実に自分が何かに恐怖していることだけは明確だった。

何を俺は恐れているんだ？

自分の家の玄関じゃないか、何が怖いんだろうか？

「あれえ……お兄ちゃん？　何してるの??？」

その時、俺の思考を中断するかのようには俺の背後で、今朝聞いたばかりのまだ幼さの残る声があった。振り返ると、恐らく帰宅してきたのであろう妹の百合亜がきよとんとした、という表現がしっくりくるような表情で俺を見ていた。

「あ、百合亜ちゃん！ 今帰ってきたの？」
「吹雪お姉ちゃんっ！！」

吹雪の言葉に、吹雪の存在に気がついた百合亜は本当に嬉しそうな笑みを浮かべて吹雪よりも更に小さい背を伸ばして吹雪に抱き着いた。……吹雪の背の小ささもかなりだが、百合亜は更にすごい。もはや小学生低学年程度にしか見えない。毎度見るその光景に、俺は1人苦笑する。

「それで、お兄ちゃん。 何してたの？」

「え？ ああ、なんでもねえよ」

吹雪に愛でられたままの状態で尋ねてくる百合亜に、俺は適当に笑って誤魔化する。

いつの間にか、先ほど心の中に巣くっていた恐怖は俺の中からすっかりと消え去っていた。

「ふうーん……じゃあ、お家入ろう？ そうそう！ 吹雪お姉ちゃん、百合亜ね、この前新しいゲーム買ったんだよ！ 一緒にやろう？？」

「わぁーい！ 早くやりたいな！ ねえ、醍くん、行こう？」

さっきの俺の言葉を気にしているのだろう、吹雪は俺のことをうかがうように言う。

「うっしや！ じゃあ、早く行くか！」

俺はそう言い、威勢よく玄関の扉を開く。

いつも専業主婦である母さんが家にいるので、大抵玄関の鍵は掛かっている状態になっているのだ。

「「ただいまー!」「お邪魔しまあす!」

半ば叫ぶように言いながら、俺たちは靴を脱ぎ、家の中へ入る。買物にでも出かけているのだろうか、母さんの声は聞こえてこない。

俺たちは大して気に留めずに、家の奥の2階にある百合亜の部屋へと続く階段へと向かう。

「……………ねえ」

最初に異変に気がついたのは、吹雪だった。

「どうしたの?」「どうしたんだ?」

「なんか、変なおい……………しない?」

顔をしかめながら言う吹雪。

言われてみると、たしかに……………。

「たしかに」

「何のおいだろう……………」

かすかにだが、そのにおいはしていた。

錆びた鉄のような……………臭ぎ慣れない、異様なにおい。

「どこからだ?」

「さあ……………?」

「あっちじゃないかなあ?」

そうやって百合亜が指差したのは、リビング。部屋の扉が閉まっているため、部屋の中は見えない。

「開けてみるかー？」

「百合亜はどつちでも良いよあ？」

「うーん……とりあえず、見てみよう？ 何のにおいなのか気になるし」

「じゃあ、開けるぜえー！」

軽い口調とともに、俺はリビングの扉を勢いよく開ける。

次の瞬間、それを後悔することになるとは夢にも思わずに……。

「」

「！！！！？」

目の前に現れたその光景に、俺たちは理解できずにいた。朝とは確実に違う、変わり果てた場所が、そこにはあった。

荒れ果てた部屋。

白いレースのカーテンは引き千切られ、家具は滅茶苦茶な状態に。暖色系に統一された部屋の壁のところどころが、見たことのない色に変色している。……あの色は……あの真っ赤に染まった色は……なんだ？

それと同じくして、床に広がる紅い液体。……においの正体だろうか？

そして、その液体を辿り、辿りついたもの。それが、俺には理解できない。

そこには、両親がいた。

あの温和で優しくかった両親からは想像もつかない、恐ろしい表情で恐怖に歪んだ顔。血走った眼。何かを叫ぶかのように開かれた口。

頭から流れる、あの紅い液体。そのところどころは、時間が経っているのか、凝固して固くなっている。

そして目を引くのは……ギラギラと異様な光を放つ、大きなナイフ。そのナイフは、1番紅色の濃い……両親の、心臓にあたるであろう場所に。深々と刺されていた。

……ようやく、こちら側の俺も何があったのか理解する。

恐ろしさに奥歯がガチガチと鳴るのを、止めることができない。信じたくない、しかし目の前に在る、確実にして絶対の現実。

両親が……殺サレタ……。

……これが、これから起こる狂気の、最初の幕開けだった。

？・日常ノ破壊音（後書き）

こんにちは、秋羽梨紅です。

いよいよ本題です！最初はそれほど酷くないです
次話がいつになるのか……最近、リアルでの気分の上下が激しいの
で、確実なことは言えませんが、そう遅くはないかと！！

それでは、読んでくれたあなたに最高の感謝を込めて。
また次回お逢いいたしましょう！！

？・舞イ降りタ蝶

「ね、ねえ……どうゆ、こと……？」

俺の隣にいた吹雪が、震える声で呟くようにそう言う。しかし、今の俺には、それに答えてやるほどの余裕はなかった。

奥歯がガチガチと鳴るのを止めることができない。

頭の中は真っ白で、何も考えることができない。そのくせ、頭の中がグルグル回転し、渦巻いた得体のしれない感情が凌駕する。……
気持ちが悪くなる。

「ママ！ パパ！？ どうしたの、ねえっ……！」

状況が完全に理解できていないのか、それとも、理解できてゆえの行動なのか。

百合亜はまるで狂ったかのように叫びながら、部屋の中へと駆けてゆく。

「あ、百合亜ちゃ………！」

気付いた吹雪がそれを止めようと百合亜へと手を伸ばすが、百合亜はそれを振り払って変わり果てた両親の元へと駆けてゆく。

俺は、その場に張り付けられたかのように声はおろか、身動きすらできずにいる。

百合亜が駆けてゆくのを、ただ眺めていた……。

「ママ？ パパ！ ねえ、起きてー！！ 起きてよっ！」

悲痛な声。

張り上げた甲高く、まだ幼さの残る百合亜の声が、部屋の中に大きく反響する。

駆けて行った百合亜の白い靴下は、床に広がった紅い液体の色に染まっていた。

靴下だけではなく、卸したての制服が血まみれになることも顧みず、百合亜は両親の隣にしゃがみこみ、母さんの頬に手を当てる。

「え……？」

ぬちゃり、と。

母さんの頬に触れた手が、紅い血にまみれているを見て、百合亜は驚いたように呟く。

「う、そ……」

その驚愕に満ちた言葉とともに、百合亜は頭をぐらりと小さく回転させ、両親の作った紅い血だまりの中に沈んだ。

「百合亜っ！！」

それとともに、さっきまでのことが嘘だったかのように、俺の声と身体が自由を取り戻した。

「おい、百合亜！ 大丈夫か、百合亜っ！！」

俺は足早に百合亜の元へと駆け寄り、両親の血にまみれた百合亜を

揺り動かす。反応はない。……気を失ってしまったようだ。

「醍くん……」

吹雪の震えた声がする。

青褪めた顔の吹雪の金の瞳は、恐怖の色に揺れていた。

その時だった……。

「……え？」「蝶……??」

俺たちの前を、見たこともない1匹の蝶が舞い踊っている。

床に広がる液体の紅い色にそっくりな……美しく、優雅に舞う蝶。

どうしてこんなところに？

リビングの窓は完全に閉め切られていて、とても入れるとは思えない。

「「あ……」」

その瞬間、見ていたはずの蝶が、ふと視界から消えた。

蝶の飛んだ、紅い軌跡を残して。

「なんだか、面白いことになっているようですね？」

クスクスと。まるで嘲るかのような笑い声が、俺の背後から聞こえてきた。

吹雪とともに振り返ると、そこにはいつの間にか、あの蝶と同じ羽根の色をした、紅い着物を身に包み、見下したような笑みを浮かべる美しい少女がいた。

百合亜と大して変わらない背丈だから、小学生くらいだろうか？もちろん、百合亜のように年齢の割に見た目があまり成長できていないような類の少女ならば話は別だが。

紅く大きな瞳に、腰あたりまで伸びた紅い髪。肌は病的なまでに白い。

美しく、妖艶で、しかし、なぜか恐怖を感じさせる。そんな少女だった。

「……誰だ？」

「あらあら、敵意むき出しですわね？ わたくしはティアル・ディアルと申しますわ」

俺の敵意を軽く受け流し、クスクスと嘲笑うように微笑む、ティアルと名乗る少女。

「何者だ？」

「クスクス……それは秘密ですわ。そのようなことよりも、わたくしは伝言を頼まれてこちらまで来たんですことよ？ よろしくて？」

「知らないな。伝言って誰からだ？」

敵意をそのままに、俺はそう尋ねるが、ティアルはそれを無視して話し出す。

「ご機嫌麗しゅう、醒夜様、吹雪様、それに……百合亜様。」

我は、煉獄界を支配する魔天使、リアルベーチエ・シャリアと申し

ます。

突然ですが、我はあなたたちとゲームをすることにいたしました。当然のことですが、あなたたち人間には拒否権はありません。

ゲームに賭けるのは、あなたたち、そして、あなたたちのご友人様や親族等々……。

そのの、生命……すなわち、命が、賭けの対象となっております。

あなたたちがゲームを放棄した場合、賭けの対象の命をすべて奪わせていただきます。

あなたがゲームに勝利した場合、我らの存在が消失いたします。

もちろん、そのゲームの間などに奪われた生命等々はすべて蘇らせると約束しましょう。

……逆に、あなたたちがゲームに敗北した場合。

我らは、あなたたちの命を奪い、永遠の幻想郷を創り上げることでしよう。

もちろん、ゲームの間などに奪われた生命等々は永遠にそのままとなります。

我らの幻想郷の創作に、どうぞせいぜい我のために歌い踊り狂いなさいな！

リア

煉獄界の魔天使、リアルベーチエ・シヤ

？・舞イ降りタ蝶（後書き）

こんにちは、秋羽梨紅です。

最近、妙に更新の速度が速い気がします。

このままの速度を維持できれば良いのですが……。

今回は、突然の超展開になりました。

またもやロリ系キャラが新登場……ティアルちゃんです！
和風系のロリキャラ（？）なのです！（^^）

リアルベーチエはすごい人みたいなイメージです。私的には。
リアルベーチエの登場までは、もうしばらくお待ちください。

それでは、また次回に

？・百合亜ノ言葉

「……………それでは、リアルベーチエ様を退屈させないよう、せいぜい頑張ってくださいな」

皮肉な口調とは裏腹に、ティアルは優雅な仕草でお辞儀をすると、またあの紅い蝶となって部屋を飛び回り、やがて紅き軌跡だけを残して消え去った。

「どうゆう、ことだよ……………」

リアルベーチエ？ティアル？煉獄界？魔天使？ゲーム？賭け？永遠の幻想郷？

……………わからないことが多すぎる。むしろ、わからないことしかない気すらしてきた。

ただ、あのティアルと名乗る少女が人間ではないということだけが確実なことだ。

「なんなんだよ……………」

俺はそうつぶやき、百合亜を抱えていない方の手で頭を抱える。その時だった。

「う……………うう？」

「百合亜？」「百合亜ちゃん！」

意識を失っていた百合亜が、ゆっくりと目を覚ました。

百合亜が起き上がるとともに、彼女の長い黒髪がサラサラと揺れる。

「あ、お兄ちゃん……おはよう」

「いや、もう夕方だし。　って、そうじゃなくて……」

気を失ったせいなのか、状況をすっかり忘れてしまっているらしい。こんな状況、俺も早々に記憶喪失にでもなって忘れてしまいたいのだが、それだと話が一向に進まなくなってしまうので、説明を始めようとまずは両親の死体を……、

「……？　あれ？」

「どうしたの？　お兄ちゃん」

無かった。いや、正確には、無くなっていた。

「醒くん？」

「吹雪、さっきまでここにあったよな……？」

「え？　あれ……なくなってる!？」

吹雪が周りを見回しながら、驚愕に満ちた声をあげる。

無くなっていた。

床や壁のところどころについていた紅い液体も。

引き千切られていたはずの白いレースのカーテンも。

滅茶苦茶にされていたはずの部屋の中の家具も。

そして……両親の、あの死体も。

すべて、何事もなかったかのように元通りになっただけ。

見間違いだっただのか？　いや、そんな見間違いをするはずがない。

見間違いなら、吹雪も俺と同じ反応を見せたのはおかしい。

「ねえねえ、2人ともどうしたの？」

百合亜だけが、状況を理解できずにいる。

なぜ死体が消えてしまったのかはわからないが、両親が死んでいたのは確実なことだ。

「……百合亜。気を失う前のことは覚えているか？」

「え？ うーんと……みんなでゲームしようってお家に入ったことまでしか覚えてないかな」

「その後のことは、まったく覚えてないのか？」

「うん、覚えてないよ」

こくん、と小さく頷く百合亜。

状況は理解できていないが、俺たちの深刻さが伝わったようだ。少し不安そうにしている。

「あのな、信じられないかもしれないが……両親が死んだんだ」

「へ？」

「もう死体がなくなっているんだが……さっき、ここに両親の死体があっただ」

「え？ もう、やだあ！ 突然、何の冗談なの？」

「冗談じゃない。本当なんだ」

「嘘でしょ？ 百合亜、わかるよ？ だって、どうしてパパとママがお家にいるの？」

「え？」

百合亜は、何を言ってるんだ？

話がかみ合っていないというよりはむしろ……話の根本が、そもそも

ずれている？

「百合亜、何を言ってるんだ？」

俺の質問に、百合亜は謎の解けた探偵のような晴れ晴れとした表情の笑顔を浮かべながら、偽りのない声高であっさりと言い放った。

「だって、パパとママは今、お仕事で外国にいるんだよ？ だから、ここにパパとママの死体があるはずないじゃない！」

？・百合亜ノ言葉（後書き）

こんにちは、秋羽梨紅です。

今回は、百合亜ちゃんがメインかも？

個人的に、百合亜ちゃんは好きキャラです。

意味のわからない感じに今回は終わってしまいました……。
次回、ちゃんと説明いたします！！それでは

？・存在ノ理由

「だって、パパとママは今、お仕事で外国にいるんだよ？　だから、ここにパパとママの死体があるはずないじゃない！」

「……は？」「え？」

不可解な百合亜の言葉に、俺と吹雪の声が重なる。
理解ができない。百合亜は、いったい何を言っているのだ……？

「百合亜。お前こそ、何の冗談を言っているんだ？」

「ほえ？　冗談って、何が？」

「父さんと母さん、外国になんて行ってないだろ？」

……最初は。

両親の死に対するショックでわざとそう言っているのだと思った。

「お仕事で外国に行ってるよ？　お兄ちゃん、百合亜と一緒にお見送りしたでしょ！」

しかし、百合亜のまっすぐで無垢な瞳が、そうではないことを無言で教えてくれた。

百合亜はその言葉を、大真面目に言っているのだ。

父さんと母さんは仕事の都合によって外国に住んでいて、だから、この家には俺と百合亜しか初めからいなかったのだと。だから、この家に父さんと母さんの死体があったなんて言うのはおかしい、と。

百合亜は、そう言っているのだ。

目が覚めてから今までのこの短時間で考えたものだとするのなら、百合亜にしては出来過ぎている。

成績優秀な吹雪ならばともかく、百合亜の成績は素晴らしくどん底なのだ。……どうやら、オカルトに関する知識のせいで、学習するまでの脳が残っていなかったらしい。

……まあ、たとえ百合亜がそんなことを短時間で思いついてしまうような天才だったとしても、多分俺は百合亜がそれを本気で言っていることは理解できただろう。

なぜか？それは、俺の妹だからだ。ああ、先に言うておくが、俺は決して変態のシスコンという趣味の持ち主とかそうゆうわけではなから勘違いしないでほしい。

「ねえ、どうゆうことなの？」

「よくわからないが……百合亜は本気で言ってるっばいな」

「うん、それはなんとなくわかるけど……」

「うーん……記憶違いか？」

「記憶違いって、何の記憶と間違えるの？」

「さ、さあ……？」

百合亜に聞こえないように、俺と吹雪は小さな声でひそひそと話す。わかってるのは、百合亜がそれをどうしようもなく本気で言っているということ。それだけ。

それがさらに、俺と吹雪を困惑の海の深みの中へと招いている。

「ねえ、もしかしてなんだけど……」

「なんだ？」

「醍くんのお父さんとお母さんが亡くなっていること、私と醍くん

しか知らないんじゃないかなって……」

「そりゃ、百合亜を除いて俺らしか死体を見ていないわけだしな」

「そうじゃなくて！ 消えちゃったんじゃない？」

「実際死体消えてるしな……」

「いや、そうでもなくて……。死体が、じゃなくて、えと……。醒くんのお父さんとお母さんの存在自体がってこと……」

「……存在自体が？」

「うん。もしもあのリアルベーチエっていう人が実在して、ゲームをするとか言っていたのも本当だった場合、ゲームの内容に確か、私たちの周りの人たちの命を奪うってことも含まれていたよね？」

「ん……。ああ、確か言ってた気がする」

「ゲームでもし私たちが勝った場合、奪った命はすべて蘇るんだよね？」

「言ってた話ではな」

「ってことは、勝った場合、死んだ人間が生き返るなんておかしいよね？」

「おかしいというか、普通にホラーの域に入ってるな」

仮にゲームとやらに勝って、それまでの間に奪われた周りの人間の命が戻ってきたとして、俺はその人たちと普通に接せられる自信はないな。

「もしそうだったとしたら、この世界に矛盾が生じると思わない？」

「ああ、かなりのな」

この世界の輪廻とかそういういったものが普通に崩れるな。

ゾンビか？その人間はゾンビというくくりになるのだろうか？

そうだったら、この世界の平和のためにも粉碎しなければならい
な。

せつかくゲームに勝っても、ゾンビとして粉碎するのなら、何の意味もないじゃないか……ははは。

「だからね、殺して私たちがそれを認識したら……」

「……認識したら？」

「その人たちの存在を、この周辺からはなかったことにしてしまうんじゃない？」

「……………」

否定は、できなかった。

実際、さっきまであったはずの両親の死体は跡形もなく消え去っている。

そして、気を失って両親の死んだことを忘れた百合亜は、両親は外国にいたと言った。

両親は死んだ。

そして、俺たちはその死体を見せつけられた。

その後、死体は跡形もなく……殺された形跡も、完全に消え去った。両親の死体を見たとはいえ、気を失っていたため、リアルベーチエのいうゲームについては何も知らない百合亜。その百合亜の言葉が、何よりの証拠だった。

「ねえ、2人とも、何の話をしているの？」

何も知らない百合亜は、ただ無邪気に、人懐っこい笑顔を俺たちに見せた。

……その姿を見て、俺は強く確信した。

。幻想郷へのゲームは、もう、始まっている……

？・存在ノ理由（後書き）

連続投稿って気分が良いですね、秋羽梨紅です。

いよいよ、幻想郷へのゲームのスタートです！

そろそろリアルベーチエ様も登場するのかなあ。

それでは、また次回につ

? 煉獄ノ嘲笑

煉獄。

天界と現世との間に浮遊すると言われ、また、地獄と現世との隙間に横たわっているとも言われる、「本来、現世に存在するはずのないものが存在する」世界。

現世で不可能であるものが可能に、現世で存在しないはずのものが存在する。

現世の世界でファンタジーとして分類されるものが、常として有り得る……それが、煉獄。

常に現世と隣合わせに存在し、しかし相容れることはお互いに行かない。

互いの世界の常識がまったくとして逆であり、干渉することは双方の破壊を意味するのである。

隣にあるが、それを知るものはごくわずか。

現世で「超常現象」とされるものは、大抵が煉獄の世界のものが混じってしまったことよって引き起こされ、それよって混乱が生まれないのは、双方の世界が一定の距離を保ち続けてきたことよって今日までを過ごしてきたからである。煉獄の世界でも、同じことが応用される。

煉獄の世界には空がない。

正確には、空は永遠に変わることのない夕陽に照らされている。煌びやかであり、美しくあるが、変わらないその空は、なぜか不気味さをもたらず。

その夕陽の空を、一羽の紅い蝶が舞っている。

ひらひらと優雅に舞うその蝶は、大きな宮殿の中へと舞い込み、そして蝶は美しく幼い少女……ティアルの姿へと変わった。

そのティアルに、後ろから落ち着いたしかし、まだ少し幼さの残る声が響く。

「ずいぶん遅い帰りですね、ティアル嬢」

「あら、そう思うのでしたら次からご自分で行かれたらいかがなの？」

声に対して振り返ることもせずにつっけんどんに返すティアルに、後ろにいる人物は何がおかしいのか、クスクスと笑う。

ティアルの後ろで笑う、瑠璃色の肩まで伸びた髪をなびかせる美しい青年。

彼が実質この煉獄の世界を支配する、リアルベーチエである。

背中から伸びる大きな白い翼で、彼が現世の世界のものでないことは一目瞭然である。

「次回からはそういたすとしましよう。それで、彼らに伝言は伝えてきてくれましたか？」

「当たり前ですわ？ なんのためにわざわざあちらの世界に行ってきたと思っていまして？」

「そうですね、お疲れ様です。ティアル嬢」

「どういたしましてですわ」

どこまでもツン、とした態度のティアルに、青年は困ったように苦笑しながら話を進める。

「……それで？ どうだったんですか？」

「敵意むき出し、といった感じでしてよ。 それと、百合亜……でしたか、その少女に関しては気を失っているようでしたわ」

「ほう。 あれくらいで気を失ってしまうようでは、ゲームを持ち堪えられるかが気になりますね」

「わたくしはどうでもいいですわ」

「そうですか。 そういえば、ティアル嬢は、血生臭いのがお嫌いでしたな」

「あの死体には吐き気がいたしましてよ？」

「そうでしょうね、もう少し派手にやりたかったんですが、ティアル嬢がそういうと思ひまして、少し自粛したんですがね」

そう言つて余裕の笑みを浮かべるリアルベーチエ。

死体をつくったことによる罪悪感などは、端からないように。

その証拠に、彼は魔術で紅茶を創り出し、それを机に置き、椅子に座る。

「ティアル嬢もいかがですか？」

紅茶を魔術で創り出しながら、リアルベーチエは問う。

そこで初めてティアルは振り返り、不機嫌そうな表情のままに椅子に座り、紅茶を受け取る。

「……いただきますわ」

煉獄の世界と現世。

関わりあわないはずの世界が干渉を始める……。

現世に対し、煉獄は嘲笑を浮かべている。

？ 煉獄ノ嘲笑（後書き）

お久しぶりです、秋羽梨紅です。

かなり久しぶりの更新！

待っていただいたいでいた方には非常に申し訳がないです、ごめんなさい。

今回は、現世ではなく、煉獄の世界のほうのお話です。

文章力がないため、かなりグダグダですが……

頑張るので、見捨てないでください！では、また次回につ（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8704s/>

桜吹雪八此処二散ル

2011年9月27日17時36分発行